安田女子大学紀要　40，113–126　2012.

裁きから赦(ゆる)しへ[1)]

――ウイグル族の語りを「症候」として読む――

西　原　明　史

From Judgment to Remission: Reading the Discourses of Uighur as Symptoms

Akifumi NISHIHARA

はじめに～新疆の現状～

今年（2011年）の夏も新疆は騒がしい。７月半ばに南部の都市ホータンでウイグル族による派出所襲撃事件が，7月末には同地域にあるカシュガルの繁華街で無差別の襲撃事件があったと報道された。８月に入ると今度は同じく南新疆のアクスで独立運動への参加を求めるビラが発見されたという[2)]。これでは当地の緊張は高まるばかりだ。新疆ウイグル自治区の首府ウルムチで発生した大規模な騒乱から２年がたち，情勢は落ち着いたように見えていた。しかし実際には，ウイグル族の中国政府や漢民族に対する不満や怒りは全く沈静化していなかったのであろう。

それも仕方がない。いわゆるシルクロードとして様々な民族が行き交い，東西文明が融合する舞台だった新疆では，今でも多くの民族が暮らしている。しかしこの地がかつて持っていた異文化の交流は見る影もない。ウルムチの目抜き通りを歩いてみるとよくわかる。林立する高層ビル街。高架線が縦横に走り，一日中渋滞しっぱなしの交通事情。その雰囲気は中国の他の大都市と瓜二つと言っていい。そして歩道を埋める人波に混じってみると，聞こえてくるのは漢語ばかり。ここはもはや中国のありふれた一地方都市に過ぎなくなってしまったのである。

900万とも言われるウイグル族は現在も新疆最大の民族だが，漢民族も780万を数え，大きな差はない。そして，それは今後ますます縮まっていくはずだ[3)]。そうなると当然，「日常生活のさま

1）　タイトルになった「裁き」と「赦し」という言葉は，内田樹の『ためらいの倫理学』から借用している。彼は同書の中で，正義や真理の名の下に徹底的に他者を審問することへのどうしようもない「ためらい」こそが，他者と共に生きられる社会を築くために必要であると説いている。例えば，「慈愛と正義の終わりない循環」，「『裁き』と『赦し』のめまぐるしい交替」が，「他者との出会い」を立ちゆかせると語っている部分などにも，彼の主張が現れている（内田，2008a: 124–125）。この考え方に触発されて，哈密のウイグル族が漢民族と共生することを可能にしている理由を探求しようと思い立ったため，本稿のタイトルとしてこれら二つの言葉を用いることにした。

2）　産経ニュース電子版の記事，「独立運動への参加求めるビラ発見　武装警察が警戒　中国新疆自治区」より（2011年８月９日14時16分）。

3）　2000年の国勢調査によると，1990年の同調査に比べて10年間で漢民族の増加数は197万人，増加率は31.5％だった。一方新疆の少数民族は全てを合計しても151万人，増加率は15.9％だったという。いわゆる一人っ子政策は漢民族には厳格に適用されているが，少数民族には二人まではかまわないという ↗

ざまな面で地元民族と直接接触し，地元の資源や市場を奪い合う」ことになるだろう（王，2011：67）。問題はその結果だ。新疆は中国の一部であり，当然漢民族が政府の首班となる。従って，「漢族が新疆の大部分の権力資源，経済資源，知識資源を握っているので，彼らは新たな分配や新しいチャンスのたびに，地元民族を上回る利益を強奪する力を十分に持っている」のである（王，前掲書：65）。

ウルムチの観光地として知られ，ウイグル族の暮らしに欠かせない食品や民族衣装，生活用具や工芸品が売られていたバザール（市場），「二道橋市場」も閉められ，その向かい側にモスクを模した巨大ショッピングモールが建てられた。付近に広がっていたウイグル族の伝統的な民家もほぼ一掃されている。10年近く前，大学では全ての授業で漢語を使用することが義務づけられたが，昨年の９月からは，それが幼稚園から高校まで全ての学校に適用されたと聞く[4)]。伝統文化が損なわれ，政治的，経済的な搾取も進んでいる。その上言語まで奪おうとするのでは，それこそ国家による「民族浄化」と言われても反論できないだろう[5)]。これが新疆の実情なのだ。ウイグル族が漢民族に対する感情を悪化させるのも当然と言える。

ウイグル族など少数民族への綿密な取材を通して彼らの現状を広く伝え，政府の政策の改善を強く訴えてきた王力雄によれば，「ここ10数年の民族関係の悪化速度は驚くほど早く，その程度も深刻だ」という（王，前掲書：57）。毎年のように現地に通い，短期間とはいえウイグル族と接し，新疆の雰囲気を感じてきた私も正直言ってそう感じないわけではない。彼らから漢族や中国政府の悪口や罵倒を幾度聞かされたことだろう。初対面からそういう話を訴えられることもしばしばであった[6)]。新疆はこの先どうなるのか。ここまで述べてきたことだけを見れば，悲観的

↘

優遇措置がある。にもかかわらず漢族の増加率が著しく高いということは，それだけ移民の数が多いということを意味している（王，2011：67）。

4）新疆では，少数民族のために各地域に小学校から高校まで民族学校が設置されている。高校卒業後は少数「民」族が自「民」族の言語で書かれた大学入試問題で受験する（中国語で「考」試）ことができるため，通称「民考民」と呼ばれるこの学校では，少数民族（たいていはウイグル族を指すが）は自民族の教師から，自民族の言語で書かれた教科書を用いて，自民族の言語で教えてもらえたのである。そして公用語の漢語については，外国語のように週何コマという形で教授されてきた。

幼稚園から高校までこのような民族学校が設けられていたが，2010年９月より全ての民族学校で漢語使用が義務付けられることとなった。これは「双語教育（バイリンガル教育）」と呼ばれている。なぜなら，理科系の科目は漢語のテキストを使い，授業用語も漢語であるが，文科系の科目についてはこれまで通りウイグル語によって教えられているからだ。ただし数年後には全ての言語を漢語に統一する方針があるという噂も聞いた。なお，現地のウイグル族の子どもたちは，このような学校のことを「双語班（バイリンガルクラス）」と呼んでいる。

5）しかし，哈密の教育局の職員に聞いたところでは，この「双語教育」は，漢語力の上達だけでなく，国際的に通用する理科系の専門用語を習得させるために，ひいては大学入試や就職活動における競争力をウイグル族に身につけさせるために導入したものだという。「あくまでウイグル族のためを思ってスタートしたのに彼らはその気遣いを分かってくれない」と，しきりに嘆いていたのが印象的であった。

6）また，漢民族は漢民族で，ウイグル族への見方を相当に悪化させているとも聞く。今年（2011年）の８月に新疆を訪れた際に，北京からウルムチへ向かう飛行機の中で乗り合わせた漢民族の中年女性が，「私たちは同じ民族だから本音で話すことができる」と初対面の私に小声で語ってくれたエピソードが良い例だろう（容貌から私のことを漢民族と思ったらしい）。漢民族は少数民族と違って民族的アイデンティティを前面に押し出すことはあまりなかったはずだが，今や同じ漢族に強い仲間意識を感じるようになったようだ。敵（ウイグル族）の敵（漢族）は味方，ということだろうか。それほどウイグル族との関係が悪くなっているのである。

↗

な未来しか思い浮かばない。実際，王は「臨界点に近づいている」と述べ（王，前掲書：67），その著書の中で「中国は将来必ず事件が起きる。中国民主化の日は，新疆で血の川が流れるだろう」という現地知識人の言葉を紹介している。この人は将来を見越して自分の子どもを出国させようとさえしているという（王，前掲書：73）。

しかし，新疆に住むウイグル族の誰もがそんな最悪の事態を待ち望んでいるとは到底思えない。また，それを回避するためにこの地を離れるなどそう簡単にできることでもない。もちろん中国政府の少数民族政策が近い将来，大きく改善される見込みも残念ながら低そうだ。となれば大半のウイグル族たちは，今のままの新疆で漢民族と共に生きていくしか道はないことになる。それは余りに過酷な付き放しのように聞こえるかもしれない。実際，そんな将来像が許せないのか，ウイグル族が置かれた悲惨な現状を語ったり，中国政府を糾弾したりする内容のブログやサイトが日本でも次々に立ち上がっている。ユーチューブにも，ウイグル族の生の声を伝える番組や，新疆の独立を訴えるビデオメッセージが数多く投稿されている。

ただ，遠く離れた世界に住む私たちのそんな心配をよそに，現地のウイグル族たちは自分たちの未来にそこまで絶望していないような気もするのである。私がこの10年余り付き合ってきた新疆東部の哈密地区（ウイグル名はコムル）のウイグル族に限って言えば，の話ではあるのだが。彼らが漢民族に対して抱く感情は，恐らく新疆の他の地域とそんなに変わるものではないだろう。それにもかかわらず，哈密のウイグル族は漢民族とそれなりにうまくやっているように見えるのである。現に民族間の衝突が起こったというニュースを近年の哈密では聞いたことがない。新疆のどこかでテロなどの事件が起こったときも，現地の知り合いに電話してみると，「哈密は別，何も心配ない」という声が必ず帰ってくる。

いずれにせよ，哈密のウイグル族は比較的良好な民族関係を築いているのは間違いない。なぜ今の新疆においてそのようなことが可能なのだろう。ウイグル族は漢民族と一体どのような態度で向き合っているのだろう。それが本稿で考えていくテーマである。

彼らの振る舞いや胸の内がわかれば，私たちが全く相容れない他者とどのように関係を作っていけばいいのか，一つの重要なヒントが得られるかもしれない。私自身の生き方をウイグル族から学ぶ。そして，それを何らかの形でこの国の人たちに伝えていく。彼らを取材し，研究させてもらう際の私の思いである。今回もそれが変わることはない。

1.　ウイグル族の「支配的なイデオロギー」

ウェブ社会となった現代世界ではあらゆる情報が瞬時に世界を駆け巡ることになる。新疆という日本の遥か彼方で起こった出来事であっても，私たちはリアルタイムで動画を目にすることも可能だ。あの２年前の騒乱のときもそうだった。また，グーグルでウイグル族というキーワード検索を試みれば，「中国による民族の虐殺」といったセンセーショナルなタイトルを持つ掲示板やブログ，動画をいくらでも発見することができる。こうして，中国政府が新疆でウイグル族に

↘ そういえばウルムチ市で乗ったタクシーの若い漢族の運転手は，南新疆の都市クチャでウイグル族の若者が貯水池に毒をまいたという噂を聞いたと僕に話してくれた。一方，哈密で聞いた話では，ウイグル族はウイグル族で，しょっちゅうこの類のデマやうわさ話で持ちきりになるのだという。どこかでウイグル族の誰かが漢民族に暴行されたなどといった内容のショートメールが，発信源も分からないままにあっという間に広がり，それに影響され振り回される若者も実際に現れるようだ。

対して行ってきた行為，いわゆる弾圧の実態もより広範に知れ渡るようになった。

私もこういったインターネット上の情報をチェックしているのだが，少し気になることがある。どれも中国という国やその政府への痛烈な批判だけを目的としているとしか思えないのだ[7)]。ウイグル族がいわばそのためのだしに使われている，と言ったら言い過ぎだろうか。だから，自ずとウイグル族がどれほどひどい目に遭っているかを訴えるような内容のものばかりになっている。支配者と被支配者，迫害する側とされる側，残酷な政府と悲惨なウイグル族，強大な権力者と無力な人々……。挙げていけばきりがないが，徹頭徹尾，両者をこのような二項対立の枠組みの中に位置付けているのである。誰がどう見ても悪人が誰なのかが明白，という設定にしておいて，心おきなく中国やその政府を攻撃する，というのがネットメディアの基本的なスタンスと言えよう。

もちろんそこで紹介された中身が事実無根だなどと言うつもりは毛頭ない。現にウイグル族自身も自分たちが置かれている劣悪な立場をしばしば強調するのは，「はじめに」でも触れたとおりである。いかに自分たちが虐げられているか，自由を奪われているか，差別されているかについて縷々聞かされた経験は一度や二度ではない。またその一方で，何かにつけてウイグル族と漢民族を対比し，相手を貶めながら，自分たちを自慢するというのも彼らによくある語り口である。例えば，イスラームを信仰することで礼儀や節度が身に付いているウイグル族とそうではない漢族。何よりも友人や親族のつながりを大切にするウイグル族と拝金主義の漢族。要するに，「無力で善良なウイグル族と強大かつ悪辣な漢民族」，こういう図式が確かにウイグル族の頭の中にあるように思われる。恐らくこれがウイグル族の認識を支配するイデオロギーなのだ。

それにしても，これは最初に挙げた日本のネットメディアと全く同じ二分法だ。この枠組みからは漢族への非難しか生まれてこないのも同様である。曰く「私たちがこうなっているのはあいつらのせいだ」。自分たちは弱者で被害者という揺るぎない立場があるため，あらゆる不幸の原因をこうして漢族の存在に求めることができる。そして，「なぜ新疆にお前たちがいるんだ」と審問し，最後には「ここから即刻出て行け」という裁きを彼らに下すこととなる。もちろん心の中でしか描けない審判の風景だろうが，これがウイグル族の漢民族に対する基本的な構えになってしまう。

もしこうした思いをウイグル族の誰もが抱いているとすれば，新疆の民族関係は一段と険悪なものになっていくのではないだろうか。「100％お前が悪い」と罵られて，「その通りです。本当に申し訳ない」と頭を下げる人などいるはずがない。なぜなら，支配的イデオロギーとは要するに価値観であり，それを共有しない人にとってみれば何の説得力も持ち得ないからだ。むしろこのような物言いをされれば，売り言葉に買い言葉で，同じ次元で反論することになるのではあるまいか[8)]。これでは永遠に平行線をたどるしかない。

7）ブログを見ると，中国のことを「シナ」というかつての蔑称で呼んだりしているものがあった。また，ユーチューブに「報道ワイド日本」という「ウイグル族大弾圧」をタイトルにした対談番組が投稿されていたのだが，司会者は「中共」というこれまたベトナム戦争時代のマスコミを思い出させるような名称を使用していた。ウイグル族を迫害しているから中国を批判するのではなく，中国が憎たらしくてたまらないので，指弾するための好例としてウイグル族を取り上げているという印象さえ受けた。

8）新疆の民族関係を示すたとえ話として以前よく持ち出された次の会話が，その典型的なパターンだろう。バスの上でウイグル族と漢族が口論になった。その際ウイグル族が「漢民族は新疆から出て行け」と捨てぜりふを吐くと，漢族の方は「俺たちが来なかったお前らはこんな便利なものに乗れなかったんだぞ」と返したという。ウイグル族は漢族の存在を悪と認定し，漢族は漢族で自分たちこそ新疆発 ↗

つまり日本のネットメディアのような語り口，あるいはウイグル族が抱いているイデオロギーでは，新疆の民族関係を少しでも良い方向へ進めていくことは困難だと結論せざるを得ないのだ。現に報道を見る限り，新疆の政治情勢は緊張していく一方のように思える。しかし，私の主たる調査地である哈密では必ずしもそうではない，というのはすでに述べた通りだ。ということは，端的に言ってそこのウイグル族たちは二元論で漢族を分類しているわけではないということになる。ならば，一体どのような認識枠組みで漢民族を描き，また自らを表象しているのだろう。今から考えていくのはこの問いである。

2. 精神分析の流用

さて，哈密のウイグル族が持つ認識枠組みについて考察していく上で参考にするつもりなのが，幅広く社会評論活動を行っている内田樹の思想である。彼は，少しくだけた表現を用いてではあるが，対立する双方が何とかして折り合うために役立つ叡智を提案してくれているので，それをまず最初に紹介しておきたい。

「そちらにはそちらの言い分があり，こちらにはこちらの言い分がある。どうです，ここは一つナカとって……」（内田，2003a：12）。何とこれがその提案である。そう，彼が主張するのは，相容れない主張をお互いに取り下げ，修正し，再度突き合わせてみて妥協点を探すという「調整術」（内田，前掲書：12）なのである。

とはいえ，私たちの日常生活においても，自分の主張を変えることはそう簡単なことではない。メンツや意地などという感情があるからだ。ましてや現実に何らかの形で搾取や迫害を被っているという自覚がある側が，被害の与え手に対する異議を保留するなど不可能ではないかという気もする。しかし，糾弾だけでは事態をますます悪くさせるだけだということがもう十分すぎるほど明らかになった新疆ウイグル自治区では，別の対応策が求められているのも確かなのだ。ではこの「調整」のために，どのようにして「言い分」の修正を施していけばよいのだろう。

ウイグル族の言い分は，前章で述べた支配的なイデオロギーに依拠して生まれる。とすれば，まず必要なのはこのイデオロギーの見直しということになる。しかしこれが容易なことではない。内田の言葉を借りれば，「『支配的なイデオロギー』とは，その人がそれなしでは思考しえないような仕方で，その人『の中に』組み込まれているものの名」（内田，前掲書：197）だからだ。それに従ってしか考えられないのに，当のそれを裏切ったり，乗り越えるようなアイデアが生まれるはずがない。

では，「自分自身がその中に組み込まれている思考と経験の装置の構造と機能を反省的に吟味するという仕事」（内田，前掲書：199）は一体どのようになされなければならないのだろう。内田がこの問いかけに対して提案するのは，私たちが見落としてしまうもの，目をそらしてしまうものを「前景化」せよ，ということだ（内田，前掲書：196–199）。自分の信奉するイデオロギーに合致しない出来事に出会った時，私たちはそれをなかったことにする。経験として認知しないと言ったらよいだろうか。確かに見聞したはずなのに記憶としては残らなかったその出来事を，何とかして「蘇生させる」（内田，前掲書：204）ことが，イデオロギーの見直しにつながるというのである。

↘ 展に力を尽くしてきたと自負し，ウイグル族を無能な存在と見なしていることがうかがわれる。

それにしても，記憶から排除されたものを思い出すことなどできるのだろうか。一つだけその方法がある，と内田は考えているようだ。彼がその論考の中で好んで用いる思考パターンによって，それが見つけ出せる。その型とは，「これ」って「あれ」じゃないの，という結びつけである。ありあわせの材料を巧みに流用する日曜大工（ブリコラージュ）にたとえられる「野生の思考」のことだ。簡単に言えば連想と言ってもいい。ある問題を，それと全く関係がないように思われる話題と結びつけ，そこから重要なヒントを得るのが彼の常套手段である。

そして，イデオロギーによって隠されてしまったものを「前景化」する方法として彼が流用してきたのは何と精神分析であった。出来事を記憶から排除するという現象から，彼は心理学でいう「抑圧」を連想したのであろう。確かに，「感情的な苦痛から逃れるための忘却」（前田，1981：11）である抑圧と似ている。こうなってくれば話は早い。抑圧されたものを発見するための精神分析的手法を模倣すればよいのだ。

フロイトは，催眠や自由連想法などの技法を開拓し，「自由に『思いつき』が浮かぶままにしていれば，ひとりでに無意識に閉じ込められている内容は浮き上がってくる」（前田，1981：14）と考えたそうだ。もちろん，そうやって無理に思い出させなくとも，抑圧されたものは「夢，妄想，神経症などの『症候』として再帰する」（内田，2003b：86）。これが抑圧されたものを想像するためのとっかかりだ。あとは精神分析の現場で行われているように，そういった「症候」を解釈していけばいい。隠されていたものが何だったのか，おぼろげながら推定できることになるはずだ。それを認知できたとき，まさにそれを抑圧させた自分のイデオロギーの中身を自覚することができる。

以上の考察から，自分の認識枠組み，つまり支配的なイデオロギーでさえも見直せる可能性があることがわかった。とすれば，哈密のウイグル族が行っていると予想した二分法の修正もこのような方法で行われているのではないか，と見当をつけてみることは間違いではないだろう。ということで，ここからは，哈密ウイグル族の漢族についての発話や行動を「症候」として読み直していくことを通して，彼らがそうと気づかないうちに隠していたもの，つまり心の奥の本音のようなものを明らかにすることがテーマとなる。

3.　映画論の流用

記憶に残されなかった出来事は，「精神分析」のようなプロセスを経て「蘇生」する。となれば，「症候」を読み解くカウンセラー的な人物が必要だ。ウイグル族から漢民族に関する奔放な語りを引き出し，そこに込められた意味を解釈する役回りである。もちろんそれはさしあたって私ということになる。ウイグル族とは，フォーマルなインタビュー形式で質疑応答を行うよりも，むしろそれ以外の形式張らない場面で話し込むことが多い。そこで交わされた膨大な話を私はできるだけ忠実に記録してきた。本章ではその一部を取り上げ，例題として解釈を試みるつもりである。

その際にまず考えなくてはならないのは，何気ない無数の発言の中からどうやって「症候」的なものを抜き出せばいいのか，ということだ。これについては，内田の映画論が大変参考になる。彼は映画作品を分析するにあたり，「いかにも場違いに，いかにもわざとらしく，ただそこにあり，すべての映画記号を『主題』や『意図』へ一義的に整序しようとする求心的な解釈に無言で，執拗に抵抗」（内田，前掲書：49）する部分に目を付ける。

なぜだろう。実はそこにこそ映画製作者たちの本音が隠されているからなのだ。誰にも受け入れられやすいメッセージとは，社会全般に浸透した「支配的なイデオロギー」に依拠したものである。もしそれに対してどこか違和感を抱いていても，それはなかなか表明できない。映画のような大衆向け娯楽であればなおさらだ。するとそういう違和感は邪魔になるだけなので「抑圧」されることになる。しかし，前章の終わりに述べたように，抑圧されたものは「無理に思い出させなくとも」症候として再帰する。従って，映画の中のその主題にそぐわない部分とは，製作者たちが抑圧した感情が，恐らく本人たちも気づかないままに浮上した「症候」だったのだ。とすれば，それを解釈することによって，確かに製作者たちの本音が見えてくるだろう。

内田は『映画の構造分析』の中で，製作者たちが抑圧したものを映画のストーリーや画面の細部から読み取ろうとする。それは，ウイグル族が抑圧したものを彼らの語りの中に見出そうとする私と，全く同じ試みである。そう，この映画分析の手法をそのまま応用することが可能なのだ。つまり私は，彼らの発言の中から「場違いなもの」を抜き出せばいいのである。ウイグル族の支配的なイデオロギーにどこかそぐわない語り，それが「症候」だ。これをフロイトのように解釈することで，ウイグル族の「本音」，つまり隠された願望や感情も発見できるかもしれない。まずはそこから始めてみたい。

実は，そのような場違いなもの，つまりウイグル族らしくない語りというものに，私は思いのほかよく出くわしている。例えば，もうすぐ卒業学年になるあるウイグル族の大学生と就職の話をしているとき，最近は新疆に続々とウイグル族独自の民族企業が立ち上がっているという話題になった。そこで私は「そういう企業なら言葉の問題もないし，地元だから就職を狙えばいいんじゃないの」と水を向けてみた。普段よく漢族の悪口を言っている学生だったので，当然自民族企業への就職も視野に入れているだろうと思ったからだ。ところが彼は全く話に乗ってこずに，突然ふっと押し黙ってしまった。まさに場違いな反応である。

あるいはこういうこともあった。ある若者とイスラーム教談議になり，彼がウルムチにはコーランを素晴らしいウイグル語に訳した有名なイマーム（礼拝を主宰するイスラームの聖職者）がいると教えてくれた。僕がその時，「中国では有名なイマームは政治協商会議の議員になっているんでしょ。また政府から給料をもらっていると聞いたけど本当ですか」と問うと，またしても無言で返されたのである。

一体どういうことだろう。前者のケースはこういう理由が考えられる。民族企業の経営スタイルは，実際に商品を自分で企画・生産するのではなく，新疆以外の地域の漢族企業に製品の本体を生産してもらい，外形などのデザインにウイグル族風のアレンジを加えて販売する，というものだという。企業と言っても，実際に自前でものづくりを行っているわけではないので，収益も発展性も大したものではないだろう。しかし，たとえそんな企業に入っても仕方がないと彼が思ったとしても，日頃からウイグル族と漢族の差異を強調し，その図式に基づいて漢族を批判している手前，「そんなところに就職したくない」とは言えない。となると，そのような思いは抑圧されることになる。同時に，彼らの支配的イデオロギーに合致するとはいえ，豊かな暮らしがしたいというウイグル族自身も持つ素朴な希望には反するため，「就職したい」とはなかなか言いづらい。その結果が，沈黙だったのであろう。

後者の反応も同様な理由で生じたのではないだろうか。ウイグル族に見られる大きな特徴なのだが，漢民族と自分たちを差異化する際に何より先ずイスラームを持ち出す。「これがあるから自分たちは品格を保っているが，それを持たない彼らは本当に下品で粗野だ」というのである。

ところがそのイスラームの指導者が漢族の政府に取り込まれているとすれば，彼らとの差異化が打ち消されてしまうことになる。そんなことは彼らのイデオロギーから見れば許せないことだ。となれば，やはり聞かなかったことにするしかない。こうして，無反応という対応が生まれたのではないだろうか。

このように見てみると，当然想定されるものと違った反応，つまり場違いな反応の背景にはやはり「抑圧」が潜んでいるようだ。そして，ウイグル族自身は気づかないであろうが，私たち外部の者には明白な，ウイグル族と漢民族の二分法に反するものが抑圧されていた。この二分法は，繰り返しになるがもう一度挙げておくと，「無力で善良なウイグル族と強大かつ悪辣な漢民族」という図式である。要するにウイグル族は善で漢民族は悪ということだ。従って，これに反するものは，ウイグル族を否定したり，漢民族を肯定したり，あるいは両者は似た者同士，ということを示す出来事や言説ということになる。そういうものがどんどん抑圧されていく。つまりここで挙げた事例のように，決して語られることはないのである。

しかしいつも沈黙だけで終わるわけではない。抑圧されたものは「症候」として浮上するのだから。ということで，次章では，どこか場違いな語りや反応のうちに症候を発見し，それについて解釈を試みることで彼らの「本音」を明らかにしていきたい。発見の方法はもちろん，その語りや反応に中国や漢族の肯定，あるいはウイグル族の否定が読み取れるかどうか解釈することである。そしてもし読み取れれば，まさにそれが症候ということになる。

4. 症候としての語り

置き換えられる経験

あるウイグル族の大学生と散歩しながら交わした大学生活についての会話を，まずは取り上げてみたい。学生寮に住んでいる彼と同室の学生は全員少数民族。みんなカザフやウズベク，キルギス族などトルコ系民族だという。そこで私が「民族が違う友人とコミュニケーションを図るためにも，やっぱり漢語が公用語として有効だね」と話すと，「彼らとは自分の言語を話すだけでも十分通じる。何と言っても祖先が同じだからね。だから漢語を使うことは絶対ない」という反応だった。漢民族とトルコ系少数民族を区分し，漢語を自分の言語ではないと突き放している。つまりここには彼らの支配的イデオロギーである二分法がはっきりと顔をのぞかせている。

この場面に続いて出た話が，同じく学生寮で暮らすモンゴル族の評価であった。いわゆる外モンゴルからの留学生も来ているが，マナーが良く，控えめで好感が持てるのだという。それに比べて，同じ民族なのに中国のモンゴル族の学生はそれとは正反対に粗野で野蛮だということだった。これは彼らが漢族に対して持つイメージとそっくりであることから考えても，中国にいるから彼らの影響を受けてそうなってしまったのだという言外の意味が込められているはずだ。要するに漢民族を否定しているのである。

さらに学生生活の話は続く。余暇の過ごし方に話題が移り，みんなサッカーが大好きで，毎日のようにそれに興じているという話になった。やがて彼はワールドカップに出られない中国チームの弱さについて触れ，「サッカーは国家の総合力が問われる。そういう意味で中国はまだまだ他国に劣っている」とこき下ろしていた。その一方でウイグル族が中心の新疆チームは非常に強いことを紹介してくれたのだが，同時に，ウイグル族は政治的な理由で国際大会に出場する中国チームのメンバーに選ばれることはなかったと教えてくれた。ウイグル族の自慢と中国に対する

批判である。

ところが最後にこういうオチが来る。この度，余りに情けない中国チームのてこ入れのためにウイグル族の選手が７人も中国代表チームに参加することになったというのだ。このときの彼の表情は非常に嬉しそうだった。ウイグル族のスポーツ能力を誇っているわけで，彼らにすればごく自然な行為だ。うっかり見過ごされるかもしれない。しかしそこに私は軽い違和感を覚えた。もし中国に絶望し，そこから独立したいなどと夢想するのであれば，そんな国の代表チームに選ばれて喜ぶはずがない。もしそうなら彼らの普段の発言と矛盾している。ところが彼は屈託のない笑顔を見せていた。明らかにその時の話の流れから見ても場違いだったのである。

とすれば，これが症候ではないかと予想することができる。そこでこの発言を解釈してみると，次のようなことが言える。彼はその表情から見ても，ウイグル族の実力が認められたことを誇りに思っていた。ということはこの話はウイグル族の自慢のために出したものだ。しかし，自分が否定している相手から評価されて嬉しいと思う人などいない。従って，彼は中国という国家の権威を認知していたことになる。つまりウイグル族を自慢しながら，同時に中国を肯定していたと言えるのである。

さて，この一連のくだりを検証してみよう。ほとんどの語りは彼らのイデオロギーにかなった内容のものばかりだった。ところが最後の語りは，ありふれた自慢話にすぎないように思えて，その実，中国の肯定と読み直すこともできる。ということは，この語りこそがやはり症候だったのである。それは抑圧される前の姿で現れるわけではない。精神分析の専門書では，症候は，ヒステリーのように「ふつうの形では表現できない心の働きの代用品として形成される」と書かれてあるし（前田，前掲書：14），内田はもっとわかりやすく「似ても似つかぬものに『置き換え』られる」と述べている（内田，2003b：88）。

漢族を否定しウイグル族を肯定する単純な図式には統合できない出来事に，彼らは恐らくどこかで出会っているのだろう。しかしそれは彼らの記憶には包含されなかった。ところが彼らが預かり知らないところで，その出来事が語りの中に出現したのである。ただし，サッカーが強いというウイグル族の自慢話に「置き換えられて」。この語りのどこにも漢族や中国の肯定は見あたらないが，しかしわずかな痕跡は感じられた。もしかすると，ウイグル族はこのような仕方で，それと知らないうちに本音をちらつかせているのではないだろうか。この仮説を検証するために，もう少し具体的な事例に当たってみよう。

国家を肯定することの困難

例えばこんな会話も良い例として挙げられる。中国製品の質に関してある高校生と話しているとき，彼は「日本産の衣服や鞄は本当に質が良い」と賞賛してくれた。それに比べ「中国産のものはすぐ痛むし，偽物も多い」と批判する。よくある語り口である。それに対して私が「でも今は日本でも中国産のものばかりですよ」と言うと，「それはその通り。中国は輸出用に良い製品を生産し，国内に流通するのはひどいものばかり」と返してきた。 中国の技術水準を否定し，またメンツや体面ばかりを気にする漢民族の伝統的な思考法を揶揄している。しかし一方で，きちんとした技術を中国が持っていることにさりげなく触れているのである。否定の中に埋もれてはいるが，中国肯定の痕跡は確かに残っていた。

あるいはこれはどうだろう。ある若者と街角を散歩しているとき，完成して間もないモスクの側を通りかかった。これは費用を全て国家持ちで改築されたものだという。「哈密のウイグル族

は随分恵まれているようですね」と水を向けると，「ここでは信仰についての規制が新疆の他地域と違ってかなり緩やかだ」と教えてくれた。普通大学生や高校生はモスクに行って礼拝することは許されないが，哈密では誰もとがめないという。その理由を問うと，「哈密のウイグル族の知的レベルは相当なもので，法律に関する知識や意識も高い。もし政府がうかつに圧迫を加えると，南新疆のウイグル族などと違って私たちは黙っていない。正当な手段で異議申し立てをする」と述べてくれた。

哈密のウイグル族がしばしば口にするのが，自分たちの知的水準の高さだ。実際，哈密の大学進学率は全国の都市で３位になったと聞いたこともある。1949年のいわゆる「解放」以前の時期に識字率が80パーセントだったというのも，彼らの自慢の一つだ。その文脈で読めば，上記の若者の語りはよくある哈密の自慢話に過ぎない。しかし，よく読んでみよう。理由はどうあれ国家による少数民族への配慮が認知されており，また「正当な手段で異議申し立てをする」という民主的なプロセスが確保されていることへの認識も窺われる。つまりこの一連のくだりには，彼らの国家への高い評価がかいま見られるのである。哈密ウイグル族の自慢話に加え，新疆における宗教弾圧の存在も暗示されており，国家への否定が印象的な語りだが，肯定の痕跡を見て取ることがやはりできたと言えよう。

これら二つの事例は，いずれも中国の否定とウイグル族の肯定という彼らの支配的なイデオロギーに沿ったおなじみの発言である。一見しただけでは特に場違いという感じは与えないが，中国への肯定がそれらの言葉によって確かに「代理的に表象」されていた（内田，2003b：87）。彼らが明確に口にすることは決して許されず抑圧された「本音」が，やはり形を変えて露出していたのである。そのことが「どこか変だ」という違和感を私に与え，上述のような解釈を加えるように求めたのかもしれない。

民族より国家

ここまでいくつかの事例について細かく分析を加えてきたが，そのために取り上げた発言はいかにも貴重な資料のような印象を与えるかもしれない。しかし実際はそのような例は枚挙にいとまがないのが実情である。もう少しだけ実例を挙げて分析を加え，哈密のウイグル族のコミュニケーションは症候に満ちていることを念押ししておきたい。

ウイグル族の若者やその親世代の人たちと将来の仕事の話をするとき，第１希望として挙げられるのが公務員である。国家の行政機関に勤める人たちのことだ[9)]。特に今年（2011年）の５月に行われた全国一斉の公務員試験では，新疆だけで30万人が受験し，合格者はたったの７千人だったという。たまたま私の知り合いの息子さんが今年専門学校を卒業し，この試験に臨んで見事に合格した。この試験がいかに難関であるか，どれほど試験勉強を頑張ったか，それを家族がどれだけサポートしたかをこの友人や奥さんが私に語ってくれたのだが，もちろんそれは息子についての微笑ましい自慢話である。

9）かつては「国家幹部」と言われていた職業だが（もちろん今でも言われているが），最近では日本語同様の表記の「公務員」と呼ばれることが一般的だ。何でも2000年くらいから全国一斉の国家公務員試験が実施されるようになり，その頃からこの試験に通って国家機関に入った者をこう呼ぶようになったようだ。それまでは大学や短大，専門学校を卒業した者を，地方政府の人事局が出身地の役所や学校など国家機関に割り振っていたが，そうして就職した人たちと区別するためだろうか。今の若い人たちは，この「国家幹部」という言葉を使わないように思える。

しかし彼らのイデオロギーに照らしたとき，これもまた非常に場違いな発言になる。というのも，公務員になるということは，モスクに出入りすることができなくなることを意味する。つまりおおっぴらにイスラームを信仰することが不可能になるわけだ。実はこの若者は高校生の頃からイスラームに目覚め，解説書などを一生懸命に読み，1日5回の礼拝も欠かさない少年だった。しかしこの信仰心を抑えてでも，公務員になることを望み，そのために大変な努力をしてきたようなのである[10)]。

さらに次の意味でも場違いなものだ。国家公務員になるということは体制側に入ることであり，ウイグル族が漠然と抱いている独立への夢を放棄することでもある。万が一そんなことにでもなれば，やっとの事で得た地位を失ってしまうのだから。しかし彼ら親子は夢をあきらめるという損失を顧みず，公務員になって一生安定して暮らすことを望んだのである。この選択の背景には，中国がこれから更に経済発展し，また政治状況もそれなりに良くなるであろうという国家への信頼があったはずだ。破綻しそうな国の公務員など目指すはずがないのだから。つまり中国を肯定しているからこそ持ち得る希望が，「公務員になること」だったのである。つまり，これもまた息子の自慢話に姿を借りた症候だったと言える。

最後に，ウイグル族による漢民族批評についての端的な語りを紹介したい。ウイグル族からよく聞く漢民族への評価には，「新疆に生まれ育った漢族は私たちの伝統や習慣をよく理解してくれるが，内地（新疆や内蒙古，チベット以外の中国のことを指す）から移民してきた漢族は全く私たちのことを配慮しようとしない」というものがある。ところが一方で哈密の文化行政を担当するあるウイグル族から，「新疆の漢族は内地の漢族に比べて相当に質が低い。だからしょっちゅうウイグル族とけんかになり，漢族がナイフで刺される事件がよく起きる」と教えてもらったこともあるのである。もちろんこの矛盾した語りに私は違和感を覚えた。この人も以前確かに「新疆の漢族は良いけど，内地の……」というたぐいの言葉を私に聞かせてくれたことがあったからだ 。

これは一体どういうことだろう。例のイデオロギーに則れば，新疆であれ内地であれ漢族は悪い存在でなければならない。しかし恐らく例外的なケースにも数多く出会っているのだろう。その結果，あくまで漢民族に対する否定とのセットという形になっていてその印象は薄められているものの，肯定的な評価が顔をのぞかせることになったのではないだろうか。症候であるからには，意識して出てきた発言ではない。それが矛盾した発言を生んだ理由である。

5. ウイグル族のフロイトたち

以上，哈密のウイグル族たちに見られた「症候としての語り」を紹介してきた。支配的なイデオロギーに反するために抑圧された経験が，姿形を変えて蘇生してきている様を確かに見て取ることができたように思う。ただ，それを読み取ったのは語られる側の私であり，ウイグル族自身は症候の意味を知ることはない。では彼らはどうやって自らの支配的イデオロギーを知り，それを「反省的に吟味」しているのだろう。

10） 筆記試験対策のために専門の塾に通い，それに合格した後は2次試験の面接のために，さらにまた2週間の特別対策コースに入って勉強したという。また彼の父親が哈密から試験が行われるウルムチにわざわざ出て行き，つてを頼って関係者の間を奔走したという。国家公務員になるために親子でここまで頑張っていたのである。

ここでもう一度，内田樹に登場してもらわなくてはならない。彼は映画の中に見られる「それが何を意味するかよく分からないもの」こそが「私たちを解釈へと動機づける」と語る（内田，2008b：51）。確かに，意味がすらすらと頭に入ってくるのなら誰もわざわざ解釈を試みたりはしないだろう。「何でここにこんなエピソードが」，「なぜあんな語りが」と思えるような意味不明な箇所に遭遇して，私たちは初めてその意味を探ろうとし始める。

すでに何度も見てきたように，本稿で取り上げたウイグル族の語りには「場違い性」，ここで言う「何を意味するかよく分からないもの」がしばしば含まれていた。それはウイグル族どうしの会話の中でも，やはり相手に解釈への意欲をかき立てさせるのではないだろうか。語った側ではなく，語られた側が発言に違和感を持ち，その意味を考える。私が本稿で行ったように。そしてフロイトが治療に際して行ったように。その結果，そこに漢民族や中国への肯定や評価を発見することができれば，「なるほど，こういう見方もあったのか」と，新たな知見を得ることになる。こうして決して口にできなかったものが存在することが分かれば，一体それはなぜ隠されていたのか考えるだろう。その結果，自分が何にとらわれていたのかが初めて可視化される。つまり「支配的なイデオロギー」に気づくことができるのである。

このたった一つのイデオロギーで，彼らが生きる新疆の多種多様な人々を分類できるわけはない。現実にこのイデオロギーを揺るがすような出来事がしばしば生じているはずだ。その証拠が，この回りくどい代理表象だった。そこまでわかれば，これまで自分が無意識に依拠してきた漢民族とウイグル族を二分するイデオロギーには問題があるのではないだろうか，と考えるようになっても不思議はない。このような流れの「反省的な吟味」を，ウイグル族たちは日常の中のコミュニケーションを通じて実践しているのかもしれない。

現に，「はじめに」でも述べたように哈密のウイグル族たちは，漢民族とそこそこ良好な関係を保つことに成功している。とすれば，まさに上述したようなプロセスが生じていると想像しても決して的外れではないだろう。なぜ彼らが新疆のウイグル族の中でも際立って穏当な社会を築いてこられたのか。それは恐らく，フロイトばりに対話者の症候を読み取ることを通して，自らが持つイデオロギーの修正を図ってきたからだったのである。

おわりに〜他者と共に生きるために〜

本稿では，哈密のウイグル族たちが当地の漢民族と比較的平和に共生できていることの秘訣のようなものを明らかにすることを目的としていた。それはすぐ前に述べたように，自らが依拠するイデオロギーを見直してみることだった。言い換えれば自分を作り替えることである。そうすれば世界の見え方が変わってくる。新疆の場合であれば，漢民族のありようや国家の姿が全く違って見えてくるのである。

すると二つのメリットというか利益がもたらされると私は考えている。まず挙げられるのは，漢民族から自分たちへの悪意を感じ取り，またその反動として彼らへの敵意を燃やし，必要以上に憎んだり怒ったりすることがなくなるということである。当然，そのような気持ちの変化は漢民族の側にも伝わるだろう。すると，彼らもまたウイグル族に対して穏やかに接することになる。こうなれば，お互いに気楽に，そして気分よく過ごせるのは言うまでもない。つまり心に癒しを与えてくれるのである。

また，自分たちの不幸を国家や漢民族のせいにするのをやめることで，ウイグル族の個々人に

社会に対する責任感が生まれることになるはずだ。つまり自ら行動して，少しずつでいいから新疆の多民族社会を改善していこうという意志や意欲を持つようになるのである。実際，初めて哈密を訪れた10数年前は，「漢族は私たちに何の仕事も与えない」が彼らの口癖だった。勤務時間中にもかかわらず，役所の事務室や中庭でおしゃべりにふけるウイグル族たちをよく見かけたものだ。ところが状況はここ数年で一変した。優秀なウイグル族のエリートたちが，哈密の経済発展やインフラ整備，そして文化行政の各部門のリーダーとして大活躍している[11)]。哈密の社会建設に貢献しようという思いが彼らの間にみなぎっていることがひしひしと感じられた。これが二つめのメリットである。

彼らは，自分のイデオロギーを修正することで，癒しや社会貢献の意欲を獲得していた。一言で言えば，「生きる力」を得ていたのである。この力で日々の仕事に励むことができれば，民族の違いなど些細なことにすぎなくなるのではないだろうか。仕事の上で大事なことは個人の能力や人格だけなのだから。こうして，哈密の各行政機関ではウイグル族と漢民族がお互いのありのままの姿を見つめ合いながら，力を合わせて哈密地区の発展に尽くしている[12)]。これが，哈密において民族の共生が実現している理由である。

異文化との共生のために必要なことは，自分が拠って立つ他者認識の枠組みを何とかして見直すことに尽きる。そのための方法の一つが症候の読み解きである。誰かによる他者をめぐる語りにどこか場違いさや矛盾を感じたとき，そこには何か特別な意味が隠されている可能性が高い。

11） 新疆では，2000年に中央政府が開始した「西部大開発」の一環として，経済発展した沿岸部の都市が新疆の各都市の経済建設に協力する「援疆項目（辺境地域支援プロジェクト）」が実施されている。哈密は，当初広州がこれを担当し，市郊外のゴビ砂漠に重工業の工場団地を建設し，操業を開始した。また石油や石炭，銅など資源の採掘にも取り組んでいる。その後この事業は河南省に受け継がれた。ここ数年はそこから経済の専門家集団がやって来て，商業局や体育文化局（文化行政を統括）の局長として実務を担当している。また，哈密から河南省に１ヶ月余りの視察や研修団が定期的に送り込まれている。もちろんウイグル族の公務員たちもこれに参加し，大変良い刺激を受けていると聞く。

12） 今年（2011年）も，８月下旬から９月上旬にかけて２週間ほど哈密に滞在し，取材を行った。この間，実に11回に及ぶウイグル族の飲み会に参加させてもらったのだが，そのうち３回は漢民族が加わったものだった。河南省から来た局長を迎えての歓迎会が２度，漢族の上司によるウイグル族の部下たちの慰労会が一度。流暢な漢語が飛び交い，漢族の世界で流通する笑い話をウイグル族が披露するなど，いずれも和やかに進んでいった。

哈密に通って12年になるが，その間，漢族が加わった飲み会はたった一回だけ。しかも唯一人だった。あるウイグル族が職場の同僚ということで連れてきたのだが，その人が部屋に入ってきただけで座の雰囲気が固まったことを今でも覚えている。丸テーブルの周りで誰も口を開かず，この漢族にどう対処して良いのか戸惑っているようにも見受けられた。それと比べれば，哈密の民族関係も本当に変わったものだと感じる。

そういえば，本稿で紹介したような「症候としての語り」に類するような場違いな語りにもあまり出会わなかったような気がする（ほとんど全ての事例は去年の調査までの，過去11年間の間に収集したものである）。症候はいわば抑圧を知らせる警告のようなものであり，その中身が明らかになれば消失するし，出現することもなくなる。哈密のウイグル族にとっては，国家や漢民族を肯定することになるような経験を抑圧する必要がなくなってきているということなのかもしれない。

実際，飲み会のようなざっくばらんな場でも，「私たちの国家の政策は悪くない」という語りをしばしば耳にすることになった。中国の覇権主義が日本では評判が悪いと私が言うと，中国の正当性をウイグル族から聞かされる羽目になったことすらある。家の中での会話だったので，彼らがよく言う「盗聴器」の心配はなかったはずで，これもまた現在の彼らの意識を物語る一つのエピソードであろう。ウイグル族として中国に生き，貢献するウイグル系中国人というアイデンティティが彼らの中に芽生えていると言ってもいいのではないだろうか。

それを必死で探してみることで，自分自身も縛られている価値観や感覚に初めて気づくことができる。それをきっかけに自分を創造し直すことで，他者と共に生きていく可能性を生み出すことができるのではないだろうか。哈密のウイグル族たちのように。どうやら今回の論考も，私自身が人生を送っていく上で強く意識しておきたいアイデアを与えてくれたようである。

引　用　文　献

内田　樹，2003a，『ためらいの倫理学　戦争・性・物語』，角川書店。
内田　樹，2003b，『映画の構造分析　ハリウッド映画で学べる現代思想』，晶文社。
王　力雄，2011，『私の西域，君の東トルキスタン』，集広舎。
前田重治，1981，「アンナはなぜ水が飲めないか」，『精神分析を学ぶ』所収，有斐閣，８－26頁。

〔2011．９．29　受理〕